

## 建築の近代

### 一 作家の登場

芸術家、あるいは表現者の知名度という問題を考えてみたい。誰それは有名だが、何某は、もうひとつ名前が知られてないという、あの知名度にこだわってみよう。少々俗っぽい話題なので、これまでもあまり語られてこなかった。しかし、ここには芸術、そして表現の歴史にかかわる、大きな課題がひそんでいる。とりわけ、その近代をめぐる重要な鍵があると、私は考える。あえてこの問題にとりくむゆえんである。

考証学的な報告には、なりえない。大ぶろしきをひろげたような、良く言えば大胆な仮説を、ここでは書くつもりである。悪くすれば、ほら話になるわけで、そうなってしまうことをおそれてはいる。しかし、類似のこころみもあまりみあたらない。こういう暴論にも、

すこしばかりの存在意義はあると自分へ言いきかせ、言葉をつづけよう。

私事にわたるが、私は中学生のころから、将来は建築家になりたいたと思っていた。そのせいだろう。丹下健三や黒川紀章などという建築家の名前は、当時から知っていた。磯崎新の名も、もうすこしおくれて認識するようになったと思う。同時代の建築家たちに、大学の建築学科へ入学する前から、あるていどはつうじていたのである。

しかし、私は、丹下健三より古い世代の建築家たちを、まったく知らなかった。自分と同じ時代を生き、活躍している建築家しか、わからなかったのである。それ以前の建築家、たとえば西村好時や岡田信一郎の名を知ったのは、大学へはいってからであった。

同時代の前衛的なポジションにいる作家だけを知っている。だが、より古い歴史上の作家を誰も知らない。大学受験前は、そのことを

さして不思議にも思っていなかった。しかし、あとになって、これはずいぶん妙な現象だったなと、考えだしたことをおぼえている。

たとえば、美大へは行って絵画をめざす高校生について、考えてみよう。はたして、彼が、山本容子と森村泰昌あたりしか知らないということは、ありうるだろうか。横山大観なんて聞いたこともない。黒田清輝も初耳だ。ダ・ヴィンチ、ルーベンス、アングル、モネ、ピカソ、それはいったい誰のことなのか……。とまあ、そんな反応をしめす美術家志望者は、すくないだろう。

しかし、建築家志望の私は、そういう状態におかれていた。同時代の前衛だけが私の耳にとどき、歴史上の建築家のことは、まるで関知していなかったのである。私だけのことではない。建築学科へはいつてくる学生の大半が、そうだった。長野宇平治やルドウの名を知っている高校生など、ほとんどいなかったと、そう断言できる。

おそらく、今でも状況はそれほどかわるまい。建築家をこころざす高校生も、安藤忠雄や磯崎新、そして高松伸くらはわかまえてあるだろう。しかし、曾禰達三や妻木頼黄、そしてポツロミーニ、シンケルを知るものはほぼ絶無だと思つた。

幸か不幸か、建築史を学習した私は、古い建築家たちのことも、けっこう知るようになった。江戸時代以来の大工棟梁たち、明治以後のアーキテクトたちに関する知識が、今はある。西洋の場合は、古代ギリシアのフィデアス、ローマのヴァイトルヴィウス……といつ

たラインアップを、おぼえさせられた。しかし、私はそんな自分のことを、かなり特殊な知識の持主だと思つた。一般的なそれだとは、とうてい思えない。

建築家の知名度は、二十世紀後半の丹下健三あたりから高まりだす。そして、黒川、磯崎、安藤と、さまざまな名前が、流通していった。しかし、それ以前については、ほとんど知られていない。横山大観や黒田清輝と同じころを生きた建築家といつても、ピンとくるひとは、絶望的にすくないだろう。建築志望の高校生にかぎった話ではない。現代日本の一般教養が、そうなっているのである。

もちろん、たとえば辰野金吾のことを、辰野隆の父親として脳裏にうかべるフランス文学研究者は、たくさんいる。鈴木禎次のことを、夏目漱石の義弟として了解している漱石学者もいるだろう。あるいは、中条精一郎を宮本百合子の父として意識することのできるプロレタリア文学研究者も、すくなくあるまい。

だが、こういう知識を、建築に関するそれとして位置づけることには、ちゆうちよする。一種の人物誌的な博識であろうが、彼らのことを建築家としては了解していない。宮本百合子の研究者が、中条精一郎の建築に一家言をもつことは、まれだと思つた。まあ、辰野金吾についてなら、東京駅舎のことを、あれこれ論じたりすることができるとは、あつた。

くりかえすが、現代の日本人は、かなりの教養人でも、明治大正

期の建築家に関心をもたない。それ以前の木工棟梁あたりになると、まったくイメージできないだろう。それこそ、法隆寺をたてたのは聖徳太子だというような話になってしまう。東大寺の勸進僧である重源、桂離宮の八条宮あたりもクローズ・アップされようが、建築家とよべるかどうか。どちらかと言えば、クライアント側の人物であつたと、みなしたほうがいいだろう。

西洋建築史に関する知識についても、同じことが言える。いっばんに、現代日本人は、西洋芸術史をよく知っている。たとえば、バロック音楽といえは、バッハやヴィヴァルディを連想できる人も、すくなくない。楽曲をいくつか脳裏にうかべられるものも、専門の音楽家以外に、けっこういる。ミケランジェロの絵も、バロック美術の例にイメージされよう。

しかし、ポツロミーニやベルニーニの建築作品へ、想いをはせられるひとが、どれほどいるか。はなはだ、心もとなく思う。ミケランジェロの建築家的な側面も、みのがされることが多いのではなからうか。

バッハやミケランジェロと同じころの建築家が、なかなか思いおこせない。モーツアルトやベートーヴェンと同時代の建築家についても、知識がかけている。ドビュッシーやマネのころでも、わからない。建築史に関する知見は、それだけ軽視されている。それは、建築関係のかざられたひとびとにしか、とどいていないのである。

現代日本人がイメージできる比較的古い建築家は、ガウッディあたりからだろう。ガウッディについてなら、サグラダ・ファミリアやゲル公園を想い浮かべられるひと、けっこういる。あと、ル・コルビュジェ、フランク・ロイド・ライトあたりも、そこそこ知られているようか。

最近では、外国人が日本で建築を設計する機会もふえてきた。アルド・ロッシ、レンゾ・ピアノ、イオ・ミン・ペイ、フィリップ・スタルクなどの仕事は、日本でも見られるようになっていて。彼らのことも、どこかで見聞きしたひとはいるだろう。

いずれにせよ、その知識は新しいところにかざられる。基本的には、二十世紀以後に限定されているのである。バッハやモーツアルト、そしてドビュッシーのころは、ほとんど空白になっている。そして、ガウッディ以後に急浮上する。建築における知名度の歴史は、そんな展開をしめしてきたのである。

おそらく、本家の西洋においても、事情はそれほどかわるまい。建築家についての認知度は、おなじように推移してきていると思われる。ヨーロッパでも、建築家の知名度は、二十世紀になるまで、それほど高くなっていないだろう。有名建築家の浮上は、それだけ新しい、現代的な現象なのである。

似たような知名度の歴史を、より劇的にたどったジャンルとして、服飾デザインのことを思いつく。ファッション・デザイナーの名前

が、世の表面へでるようになったのは、両大戦間期のシヤネルからだろう。それまでに、先駆的なデザイナーが、いなかったとは思わない。服飾に个性的表現を發揮させようとした先行者も、若干はいただろう。だが、その名が喧伝されだすのは、両大戦間期以後なのである。

それ以前にも、いくにんかの仕立屋が、その名前を服飾史へ登録させている。しかし、知名度は、いたってひくい。あまり世へ知られていない建築家より、さらにおちる。ましてや、音楽史、美術史などとは、くらべるべくもない。

だが、そんな服飾デザイナーが、二十世紀なごころからは、急激に知名度を高めてきた。サン・ローラン、アルマーニ……などといった名前を思いうかべてほしい。今では、建築家、画家、彫刻家などを、はるかに凌駕する名声をほこっている。小説家をはじめとする文芸方面の人材も、彼らにはおよばない。ひよっとしたら、ポピュラー音楽や映画のスターをも、上廻っているのではないか。

日本でも、同じような状況はある。ケンゾー・タカダ、イツセー・ミヤケといった名前は、圧倒的な流通性をほこっている。おそらく、造形表現という枠のなかでは、彼らの名声が群をぬくだろう。建築家たちは、二十世紀にはいつてから知名度を高めてきた。そして、後発の服飾デザイナーは、その建築家をもはるかにぬきさるいきおいで、自分たちの名を知らしめていったのである。

表現者の名前が、ことあげされるようになる。社会が、作家の名前を、肥大化して流通させていく。文学というジャンルでは、その現象が比較的早く進行した。美術はややくれ、建築や服飾はあとまわしにされる。職人芸的な要素のあるものほど、名前の流通はおくれたということか。いずれにせよ、作者の名前は、時代が下るにつれてふくらむ傾向をもっている。

近代化は、作者の名前が肥大化されるという傾向を、さまざまなジャンルにひきおこす。文学、美術、音楽のみならず、建築、服飾などといった分野へも、同じ趨勢をもたらした。のみならず、文学、美術、音楽などといったフィールドにおいても、よりいっそう大きな作者名をうみだしている。ポピュラー音楽のミュージシャンががちとった名声を、考えてみるがいい。

文学史家は、十九世紀のロマン主義が作者への幻想をふくらませたと、言われようか。しかし、ロマン主義を代表する建築家のヴィオレ・ル・デュクが圧倒的な名声を得ているとも、思いにくい。

イギリスの国会議事堂、いわゆるビッグ・ベンは、ロマン主義建築の一例である。たいへん有名な建築で、世界的にもその外観は知られているだろう。しかし、設計を担当した建築家の名前は、ほとんどわすれられている。専門家の私でさえ、はずかしい話だが、これを書いている今、思いだせないのだ。建築家に関するかぎり、ロマン主義が作者神話を増幅したとは、いいきれない。

くりかえすが、建築家の名前が広く流布しだすのは、いわゆる世紀末からである。本格的に作家がことあげされるのは、両大戦間期のモダン・デザイン以後であろう。日本では、そのモダン・デザインが後半期をむかえた、二十世紀なかごろに、知名度は高まりだしている。

音楽史になぞらえれば、十二音技法以後ばかりが有名になっていくと、評せようか。シェーンベルクからあとに有名作家が集中し、バッハらは忘却されきっている。そんな状態に、なっってしまったのである。あるいは、ピカソ以後ばかりがことあげされる美術史を、思いうかべてもかまわない。

とにかく、建築家の名声は、ロマン主義にそれほどささえられてこなかった。この芸術潮流と関連づけることは、できないのである。おそらく、メディア産業の成長といったストーリーをからめて語るべきなのだろう。新聞・雑誌の拡大が、文豪をつくりだす。レコード、CDの普及が、スター・ミュージシャンの名前をふくらませる。そういった現象を、建築界と建築家の名声についても、検討しなければならぬのだと思う。

しかし、ここではその詳細にふみこまない。表現の歴史が、作者名の肥大化を要請する方向へすすんでいく。近代化にいたり、建築や服飾にまで、その趨勢をもたらした。そのことを確認したうえで、新しい問題にとりくみたい。なぜ、事態はこういう方向へすすんで

いったのかを、考えてみよう。

## 二 差異への挑発

ひところ、建築の世界で、ポスト・モダニズムという言葉が、とびかかった。機能と合理性を追及したモダニズム建築は、ゆきづまりをみせている。そういったものをこえたデザインを、これからはめざさなければならぬ。モダニズムがうしなつた装飾性、象徴性なども建築表現に回復させる必要がある。過去の歴史的建築物なども、新しく参照されなおすべきではないかと。

近代主義⇨モダニズムのゆきすぎを反省するというかまえに、いちおうなっている。ヒロイックな前衛主義から後退し、ポピュリズムとつうじあう側面も、もつていた。やや、うしろむきの主張だと解したむきも、あるいはあつたらうか。

だが、この主張も、けつきよくは先行する建築に異をとなえている。それまでのありかたを、のりこえようとしているのである。先例に異をとなえる。先輩たちとはちがう表現を、もとめている。けつきよく、この志向もたいへん近代なのである。近代をのりこえたいというころざしじたいが、のりこえたいという一点において近代の枠内にあるということか。

大ざっぱな話で恐縮だが、前近代の民俗社会を、思いうかべてい

いただきたい。そこで、民具や民家などをつくる職人たちを、イメージしてみよう。

彼らは、基本的に先例を墨守しようとする。自分たちに先行する表現を後生大事にまもりつづけ、そこからの逸脱は可能なかぎりさけたがる。表現者としては、いたって保守的なスタンスをたもっている。ひよつとしたら、表現者という自覚も、あまりなかったかもしれない。

もちろん、先例の模倣にも誤差はある。そして、誤差も長年にわたって累積すれば、あきらかな変化が生じる。民具や民家などにおいても、数百年単位でながめれば、歴史的な発展がないとはいえない。

あと、技術的な条件がかわることも、それらの造形をかえていくだろう。たとえば、鉄器の導入、のこぎりの改良などが、新しい表現につながることはあった。さらに、異文化との接触が、新しい意匠の成立へつながるケースも、なかったわけではないだろう。

しかし、民俗社会では、先例にしたがうことが、なによりもたとばれる。職人の新奇な創意が、斬新さゆえに高く評価されるケースはすくない。基本的には、保守的であることが、良いとされている。

これにたいし、近代の表現世界では、新しさが、肯定的な評価をうけだした。少々、形がグロテスクになっただけでも、前例から脱却できていることが、ほめられる。先例からの意図的な逸脱に喝采のあつまるのが、ふえてくるのである。

模倣の誤差がつかさなって、漸進的な変化がもたらされるのではない。模倣を積極的に拒否することが、急進的な変化をつくりだす。近代化とは、後者の傾向をよりおしすすめるプロセスに、ほかならない。

近代、とくに二十世紀の芸術史は、さまざまな前衛運動をうみだした。ネオ何々、ポストなんとか……といったかけ声も、喧伝されることがふえている。このネオだとかポストなどという心意気ほど、近代的な情熱をよくあらわす言葉もないだろう。新しさをもとめるあせりが、そこへはあざやかにしめされている。ポスト・モダニズムも、その例にもれない。たとえ、近代主義の反省をうたい文句にしている、である。

こういう近代化が、いつからはじまったのかを、明示することはむずかしい。いついつの時点で、民俗社会は近代化をとげたと、日時を特定するのは馬鹿げている。じつさい、いわゆる近代にも、ここでいう前近代的な保守性が残存していないわけではない。古代や中世にだって、状況しだいでは、近代的な先例拒否のうごきがおこっていただろう。

ただ、近代とよばれる時代が、先例からの脱却に拍車をかけたことは、まちがいない。前近代社会では、歯止めのかかりやすかったことも、了承されよう。

作者の名前が、浮上するのも、この傾向と無縁ではありえない。

ある個性、ほかとはちがうきわだった作風が、近代化の進展によって、より強く要請されるようになる。そして、そんな需要にこたえる人材として、固有名詞をもつ作者が、大量に産出された。それぞれの名前も、じゅうらいより大きく語られる。

いっぽう、前近代の民俗社会では、こういう要求が、ほとんどおこらない。民具や民家は、旧態をたもつことこそが、もとめられているのである。前例に異をとなえるような個性 $\parallel$ 作者は、いらぬのだ。必然的に、作者の名前は、ほとんど流通しなくなる。

先例をあざやかに反復する職人が、名人としてほめそやされることは、あるだろう。あるいは、先例の創始者として神話化された人名が、語りつがれるケースもなくはない。しかし、個性をはつきりうちだす表現者は、うけいれられにくい。まあ、許容範囲のなかで、わずかに個性をだす、その味わいが評価されることぐらひはあつたかもしれないが。

現代の都市風俗を論じる常套に、画一化をなげくパターンがある。みな流行を追っている。判でおしたような記号化されたスタイルが、街へあふれだしている。そんな口調で、付和雷同をなじる批評文を、よく見かける。しかし、民俗社会のありようとくらべれば、個性の発露は明日だ。現代社会にも、画一化のベクトルは強く残存するが、時代のいきおひは、明白に個性化をもとめている。

それに、画一化をなげくという文章の存在したいも、個性への希

望をしめしていると言えるだろう。判でおしたスタイルがいやだから、ああいう文句も書かれるのである。まあ、その主張したいは、ある種パターン化されてしまつてもいるが……。と、以上のように、私も常套句を揶揄するような書きかたをしてしまつた。私もまた、凡庸をきらう近代に洗脳されているようである。

もういちど、近代と前近代の対比を、建築について語りたい。

前近代社会の家屋は、たいてい似かよつた造作でたてられている。規模の大小は、ややちがうが、同じような工法、素材でつくられる。周囲のそういうつた建物と明白にことなるのは、権力者の館か宗教施設である。あるいは、集会所をはじめとする公的な場所にも、風がわりな意匠のほどこされることが、ないではない。

いずれにせよ、周囲から屹立する建築の種類は、ごく少数にかぎられる。一部の施設のみが、全体のなかでめだち、あとは同一の家屋がたちならぶ。民俗社会の集落は、たいていそんな景観構成をもつている。

権力者や宗教関係の施設が、自らをきわだたせることは、比較的たやすい。とにかく、周囲の家屋はみな同じような形をしている。それらから形をずらせば、めだつことは容易である。

いっぽう、近代社会では周囲のなかで自己顕示をこころがける施設の種類の、ふえてくる。たとえば、公共の施設がそうである。庁舎、博物館、文教施設、病院……等々があげられよう。さらに、ブルジョ



ワジーも、自らの商館を一種の広告塔にしたてたがる。個人の家屋でさえ、めだつことをめざす建主が増加した。近代は、自己顕示の欲望を、よりひろく、おおぜいのひとびとに解放したのである。

自己顕示競争は、そのため前近代とくらべ、かくだんに激化した。よりめだちたがる相手が周囲にふえたので、顕示合戦にはなかなか勝てなくなる。民俗社会は、まわりがおとなしかったので、きわだつことはかんたんだった。前例を踏襲していても、容易にアピールすることができたのである。しかし、近代化の進歩は、それをほとんど困難にさせていく。

ここへいたり、前例からの逸脱を、より肯定的に評価する素地が成立する。もう、いままでのスタイルをまもっていては、めだてない。自己顕示競争を勝ちぬくためには、新しいデザインを採用する必要がある。いままでにはない形を、とりいれなければならない。近代化は、こうして新しい建築を、つきからつきへとみだすようになった。そんな要請におうじる、固有名詞のある有名建築家も、積極的に輩出させていく。

くどいが、念をおしておこう。今でも、前例をまねるケースは、けつこうある。どこそこに立派な美術館ができた。うちの街でも、似たようなものをつくってもらおうというふうなうごきが、ないわけではない。あるいは、都市景観行政の配慮で、めだちすぎる建築の竣工が拒絶されるケースもある。とくに、ヨーロッパの古い都市

では、こういうことが多い。

しかし、時代が新奇さをもとめる方向へうごいていることは、まちがいない。なるほど欧州の都市では、それをくいとめようとするポリティクスが、強くはたらいっている。しかし、郊外までは、かならずしもおさえきれしていない。何よりも、くいとめようとする政治の存在が、それとは逆方向に作動しようとする欲望のひそんでいることを、しめしている。じつさいには、日本で自由な設計を満喫し、欧州でのうつぶんをはらす建築家も、けつこういるのだが。

### 三 近代建築とは何なのか

建築界には、いわゆるモダン・デザインを近代建築とよびならわす習慣がある。一九二〇年代に浮上した、機能主義の建築を、しばしばそうよんでいる。具体的には、装飾的要素をそぎおとし、平滑な外観で構成され、空間のマッスとヴォリマームを前面へうちだした建築のことをさす。

これらの建築には、古代ギリシア風のかざりつけがほどこされない。ゴシックを思わすトレサリーなども、峻拒される。古典美学にのつとつた比例配分も、アナクロニズムだと位置づけられた(まあ、じつさいには、こういう要素も、けつこう残存してはいたのだが)。

旧来の様式からも、離脱する。その革命性ゆえに、これこそが近



代建築だと称された。そして、歴史家たちは、より古い時代にこの近代をしのばせる諸徴候を、読みとってきたのである。ギイーディオンの歴史など、その典型例だと言つてよい。

しかし、この見方だと、一九八〇年代以後に、反近代的な建築がふえることとなつてしまう。歴史を参照し、様式も回復させようとしたポスト・モダンの諸建築が、近代の枠におさまらなくなる。近代化の進展していく時期にたてられたそれらの建築を、反近代的とよぶような不都合が、生じてしまう。これはさげるべきだろう。

じつさい、歴史様式の参照という営為じたいが、とりたてて反近代的だとは、思えない。装飾的要素の強弱を、近代的であることの指標にするのも、無茶である。平滑な外壁が近代的で、凹凸が多ければ反近代的というのも、うなずけない。これらの形状から、近代的であることの度合を読むことは、ひかえたいと思う。

日本の近代建築史家には、西洋建築の流入をもつて近代化とみなすむきも、なくはない。たとえ古典美学にのつとつた建築でも、西洋建築の様式でたてられておれば、近代的なんだというのである。近代化は欧化にほかならない、というわけだ。

しかし、この定義だと、当の西洋は古代ギリシアから近代的だったことになる。なるほど、日本近代の実情をあてていど物語りはするが、東洋の国々にしかあてはまらない。やはり問題のある定義だと言える。そのせいもあるのだろう。近年は、近代和風概念化を

模索する気運も、学界のなかで強まりだしている。

私は、作家性の肥大化という歴史観を、ここへもちこみたい。前例からは意図的に脱却した。差異化への意欲を明白にもつた建築家の出現と増大という局面を、重視したいと思う。これなら、世界的に共有できる指標になるだろう。ポストモダニズムで近代は終わったなどという、妙な歴史観へおちいらなくてもすむようになる。

有名作家が量産された一九二〇年代が、ひとつの焦点になりえよう。しかし、それほどひろまりはしていないが、以前から建築家たちは、その名を流通させだしている。そして、建築にも、ある種の個性を発揮させていた。そんな経緯を遡及する作業が、近代建築史をこころざす建築史家のつとめになると思うが、どうだろう。

日本で、建築家の名とその表現が、一般に流布されたのは、二十世紀のなかごろからである。しかし、一九一〇、二〇年代には、明確に個性化をこころざした建築たちが、出現しだしていた。明治以後でも、建築界に範囲をかざれば、建築家の作風がことあげされなかつたわけではない。江戸期の作事奉行あたりにも、そうしたベクトルの片鱗がうかがえるものはいる。

提言だけにとどまってしまう現状を、心苦しく思う。考証ぬきの見取図に終始したことにも、忸怩たる思いがわいてくる。しかし、建築史界では、誰もこういう見方をだしてくれない。あえて、なれない大風呂敷へふみきつたゆえんである。